



上：研究所がある政治学・国際問題研究センター南棟
下：研究所入り口

# ハーバード大学 ロックフェラー・ラテンアメリカ研究所

（David Rockefeller Center for Latin American Studies : DRCLAS, Harvard University）

■ 所在地　1730 Cambridge Street, Cambridge, MA 02138 USA

山岡加奈子

ロックフェラー・ラテンアメリカ研究所は，1994年に，ハーバード大学内の学問分野を越えたラテンアメリカ・カリブ地域研究の中心として，自身もハーバードの卒業生であるデイヴィッド・ロックフェラー氏の寄付を得て設立された。2005年8月から，新しく建設された政治学・国際問題研究センター（Center for Government and International Studies）ビルの南棟2階に移転した。同じ階の隣には，エドウィン・ライシャワー日本研究所やコリア（朝鮮半島）研究所があり，1階にはフェアバンク・東アジア（実質的には中国のみ）研究所，3階にはロシア・東欧研究所などがある。

現在の所長は，米国・ラテンアメリカ関係史やメキシコ史を専門とし，約10年前に全米歴史学会の会長を務められたジョン・H・コーツワース（John H. Coatsworth）教授である。社会科学関連では，他にラテンアメリカの比較政治やキューバ政治を専門とするホルヘ・I・ドミンゲス教授（ウェザーヘッド国際問題研究所所長）が著名であるが，他にも公衆衛生学，医学，文化人類学，経済学，経営学，公共政策，生物学，社会学などの専門家が集まっている。米国政府認定のNational resource centerのひとつであり，研究書や雑誌*ReVista*の出版も行っている。

アルベンス政権成立に始まるグアテマラの政治不安・内戦とそれに対する米国の政策の影響を扱った古典的著作*Bitter Fruit*の最新版（1999年）は当研究所から大学出版局を通じて出版されているし，ロンドン大学のバルマー＝トーマス教授（当時）が編者に加わる*The United States and Latin America : New Agenda*（1999）も当研究所とロンドン大学か

ら出ている。*ReVista*誌は年2，3回発行されており，学術的な論考からジャーナリストや写真家によるラテンアメリカ各国の紹介まで，幅広い内容で水準の高いものである。

ちなみに*ReVista*誌2005年夏号では，「ラテンアメリカ・カリブ地域に対する米国外交」をテーマに，ドミンゲス教授がブッシュ外交の傾向と問題点について，コーツワース所長が米国の介入主義の歴史について論考を掲載しているほか，『フォーリン・アフェアーズ』誌が，米国政府がチリのピノチェー将軍によるアジェンデ打倒クーデターを支援したことを暴露した書評記事に対し，当時のニクソン政権（直接にはキッシンジャー国務長官の補佐官）からの抗議記事は掲載したのに，経済界の圧力に屈して筆者ケネス・マクスウェル（2005－06年度ハーバード大学歴史学部客員教授）の反論は許さなかった事実を書いたエッセイ，キューバの研究者2名によるキューバ・米国関係の記事，米国政府のグアテマラへの介入に関するフォトエッセイを含む3本の記事，ブラジル，ニカラグア，プエルトリコと米国との関係を論じたエッセイなどが掲載されている。

ラテンアメリカとの交流も盛んで，2004年はカルドーゾ・ブラジル前大統領が研究所を訪問しており，2005年10月にはチリのピノチェー人権裁判を指揮した検察官グスマン博士の講演会が開かれた。また2004－05年はアルゼンチンの経済大臣を2度にわたって務めたカバロ博士が客員教授として滞在している。客員研究員も毎年11～12名受け入れており，大多数は広くラテンアメリカ・カリブ地域から有給で招聘されている。またキューバからも一昨年度［2004－05年］は5名の研究者（主として医学関連分野）が客員研究員として滞在している。客員研究員は，個人の研究に携わるだけでなく，大学の授業を受け持つ人も多い。また毎週火曜日には所内で公開セミナーが開催されており，さまざまな分野のラテンアメリカ研究者の報告と討論が行われている。


研究所現所長ジョン・コーツワース教授（背景は大学のFaculty Club）

重点的にカバーされている国としては，メキシコとキューバは，おそらくコーツワース所長とドミンゲス教授の尽力で以前から盛んであるが，近年はこれにブラジルとコロンビア，米国内のラティーノ研究に力が入れられはじめているようである。

米国では2060年には，主として継続的な移民と出生率の高さのために，ラティーノ（ラテンアメリカ・カリブ地域からの移民とその子孫）が米国の人口のなかで人種的な多数派を占めると予測されている。数十年前には，米国社会の最下層に位置するといわれたラティーノであるが，いまや経済界や政界の最上層部にまで進出し，米国の政治経済社会を大きく左右する力をもちはじめている。米国にとってラテンアメリカ研究はもはや外国研究の域を超えた死活的な研究課題になりつつあるのだ。ハーバード大学のあるマサチューセッツ州は米国のなかでは北東部に位置し，カリフォルニア州やフロリダ州，テキサス州など，ラテンアメリカ地域と国境を接して移民や文化的な交流が必然的に多い地域ではないが，同大学内でも，ラテンアメリカ研究にかかわらず，さまざまな分野で活躍するラテンアメリカ出身者らしい研究者の名前を多く目にする。従来ラテンアメリカ研究がそれほど盛んでなかったと思われるハーバードでこの研究所が11年前に設立されたのは，以上のような背景と無縁ではないと思われる。

（やまおか・かなこ／在ケンブリッジ海外調査員）